

平成22年 5月14日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320061

研究課題名（和文） ツングース系危機言語のテキスト・コーパス作成

研究課題名（英文） Research for constructing a corpus of the Tungusic endangered languages

研究代表者

津曲 敏郎（TSUMAGARI TOSHIRO）

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80113588

研究成果の概要（和文）：本研究では、消滅の危機に瀕したツングース系諸言語について、ロシアや中国での現地調査による資料収集を行い、対訳テキストの印刷体での刊行と合わせて、コーパス化（大量の電子データ集積）を推進した。また、これらのコーパスを活用して、記述的・類型的な研究を促進した。さらに、現地研究者や話者を招へいしてシンポジウムや講演会を開催し、一般への普及と現地との連携をはかった。

研究成果の概要（英文）：In the present research project, we conducted fieldworks on the Tungusic endangered languages in Russia and China. The collected materials were transcribed and published with translation both for the scholarly and local use. The electronic data of the materials are available as a corpus for the descriptive and typological study of these languages. We invited foreign researchers and native speakers to hold public meetings and lectures, which achieved a good effect to promote publicity of the issue and cooperation with local community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	11,400,000	3,420,000	14,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ツングース、危機言語、原文テキスト、コーパス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ツングース諸語：ツングース諸語は日本の北方、サハリンから大陸のアムール川流域、沿海州、中国東北部、さらに東部シベリアからカムチャツカに分布する、十ほどの同系言語である。話し手の数は、多いもので数

万、少ないものでは数十人を数えるのみの極小言語であり、ツングース諸語全体を合わせても5万から、多く見積もっても十万を越えないと見られている。ほとんどは次世代への継承の途切れた、消滅の危機に瀕した言語である。

(2) これまでの研究と継続の必要性：本研究の代表者津曲と分担者風間は、これまでさまざまな研究課題による調査の機会をとらえてツングース諸語の実地調査による記述研究に継続的に取り組んできたが、資料の収集は緊急を要しており、対象と目的をしぼり込んだうえで共同と分担の効率化をはかり、収集と整理・刊行にあたる必要性を痛感してきた。そこで次項にかかげるような目的のもと、本研究の構想に至ったものである。

## 2. 研究の目的

(1) 資料収集と記録：日本語と日本文化の北方起源を論じる際に、ツングース系の人々との関係が古くから注目されてきた。しかしながらツングース諸語のほとんどは実質的な文字記録を欠いたまま、長く続いた旧ソ連および中国の閉鎖的な政策により、間接的・断片的な情報しか得られない状況におかれてきた。外国人研究者が両国において曲がりなりにも直接フィールドワークを行えるようになったのは、ここ数十年のことでしかない。そのため、日本においてのみならず、世界的に見ても、ツングースに関する研究は立ち遅れていると言わざるを得ない。加えて、急速な近代化の波を受けて、固有の言語は存続の危機に立たされており、その記録は急務である。本研究では、代表者らが行ってきた実地調査による資料収集を発展継続し、その記録を促進することを第一の目的とする。

(2) テキストの分析とコーパス化：本研究では、テキスト・データを収集・分析し、そのコーパス化をはかる。テキスト収集に特化するのには、語彙や文法事項についてはすでに一通りのデータが得られており、それをさらに深化・精密化させるためにも、良質のテキストを大量に収集しておくことが得策だと判断されるからである。とりわけ話者の高齢化が進むなか、限られた時間の中でできるだけ言語の全貌を残そうとするならば、テキストのかたちが最善である。テキストには、語彙はもちろん音韻・文法分析の材料が含まれているばかりではなく、当該民族の伝統文化や価値観といったものも読み取れる点で、言語学資料にとどまらない価値を有している。しかしながら、そのようなテキスト資料も、だれもが利用できるかたちで公開されなければ価値は半減する。本研究ではテキストの文字化と翻訳、文法分析を並行して行い、音声や電子データ形式を含めた利用可能な形での刊行・公開をめざす。

(3) 現地への成果還元：本研究は、このようなかたちで研究推進に貢献することと並んで、話者とそのコミュニティへの成果還元

も念頭においている。危機言語の調査研究において、今やこうした視点は不可欠なものとなっているが、本研究の成果は現地コミュニティにとっても利用できるよう、現地の文字と翻訳も付したかたちで刊行し、提供する。これにより協力体制の維持のみならず、現地語教育の推進や啓発に資することが可能となる。

## 3. 研究の方法

(1) 実地調査と話者等の招へい：実地調査で話者から伝承や文例を録音し、またその録音をもとに音形や意味を確認する作業が中心となる。話者自身の筆記した資料が利用できる場合は、それを十分に活用する。さらに話者や研究者を招へいすることによって、作業の共同と効率化をはかる。

(2) 収集資料の入力と加工：収集資料は音韻分析を加えて電子データ化するとともに、日本語対訳やロシア語訳などを整備し、研究者と現地コミュニティの双方にとって利用可能な形にする。

(3) 刊行と公開：冊子体のテキスト集を刊行し、音声 CD も付したかたちで、内外の研究者・研究機関の利用に供するとともに、現地コミュニティの普及・教育用に配布する。電子データはコーパスとして集積し、必要な研究者に提供する。そのほか、研究会・講演会・シンポジウムなどの機会を設けて、成果の公開と普及をはかる。

## 4. 研究成果

(1) 海外実地調査と招へい：本研究期間の4年間で、のべ16件の海外実地調査を行った（代表者8、分担者4、協力者4）。対象言語はウイльта語、ウデヘ語、ナーナイ語、ウルチャ語（以上ロシア）、ソロン語（中国）である。また3件5名の招へいを実施し、共同作業と研究協力を行った。

(2) 研究会・シンポジウム等の開催：本研究代表者が主催するかたちで研究会（2回）とシンポジウム、講演会を開催した。このうちシンポジウム「サハリンの言語世界」では本研究で招へいしたロシア人研究者による講演を含め、12件の発表があった。また講演会では、やはり本研究で招へいした3名の話者による民族歌謡の実演も合わせて行い、一般市民を含む聴衆に民族言語と文化の大切さを啓発した。

(3) テキストの刊行とコーパス作成：本研究の経費で、のべ10冊の原文テキスト集を

冊子体で刊行した。これらは代表者と分担者が20年来継続刊行してきた「ツングース言語文化論集」シリーズとして、内外の研究者・機関や現地関係者にも配布している。本シリーズは、他に例を見ないツングース語資料の集成として認知・注目されており、本研究終了時点でちょうど50冊に達した。今後も号を重ねていく予定である。一方、刊行のための電子データはそのままコーパスとして利用可能であり、代表者らの研究に活用されるとともに、すでに希望する研究者には提供されている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計30件)

- ①津曲敏郎「ウデへ語音韻論覚え書き：地域類型的観点から」『言語研究の諸相：研究の最前線』(北海道大学文学研究科言語情報学講座編、北海道大学出版会) 103-112, 2010年、査読無
- ②津曲敏郎「ウイльта語文例」『環北太平洋の言語』(呉人恵編、富山大学) 15:159-177, 2010年、査読無
- ③津曲敏郎“Long journey of walrus”『北方人文研究』(北海道大学) 3:45-57, 2010年、査読有  
(<http://hdl.handle.net/2115/42938>)
- ④風間伸次郎「ツングース祖語における接近音について」『環北太平洋の言語』(呉人恵編、富山大学) 15:59-69, 2010年、査読無
- ⑤風間伸次郎「ツングース諸語における統合度について」『環北太平洋の言語』(呉人恵編、富山大学) 15:71-83, 2010年、査読無
- ⑥津曲敏郎“Grammatical Outline of Uilta (Revised)” *Journal of the Graduate School of Letters* (Hokkaido University) 4:1-21, 2009年、査読無  
(<http://hdl.handle.net/2115/37062>)
- ⑦津曲敏郎“A sketch of Solon grammar”『北方人文研究』(北海道大学) 2:1-21, 2009年、査読有  
(<http://hdl.handle.net/2115/38236>)
- ⑧津曲敏郎「サハリンの言語世界：単語借用から見る」『サハリンの言語世界』(津曲敏郎編、北海道大学) 1-10, 2009年、査読無  
(<http://hdl.handle.net/2115/38294>)
- ⑨風間伸次郎「ナーナイ語の非人称動詞について」『アジア・アフリカの言語と言語学』(東京外国語大学) 4:133-148, 2009年、査読有
- ⑩風間伸次郎「オロチ語とウデへ語の異同について」『語学研究所論集』(東京外国語大学) 14:1-13, 2009年、査読有

- ⑪風間伸次郎「ツングース諸語の受身」『語学研究所論集』(東京外国語大学) 14:65-80, 2009年、査読有
- ⑫風間伸次郎「ニブフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について」『サハリンの言語世界』(津曲敏郎編、北海道大学) 127-144, 2009年、査読無  
(<http://hdl.handle.net/2115/38306>)
- ⑬風間伸次郎「ナーナイ語における語用論的研究」『言語の研究：ユーラシア諸言語からの視座』(寺村政男他編、大東文化大学) 159-168, 2008年、査読無
- ⑭風間伸次郎“The Diachronic Development of the Group III of Tungusic Languages” *Linguistic Typology of the North* (T. Kurebito ed., ILCAA) 1:103-123, 2008年、査読無
- ⑮風間伸次郎“Alienable Possession Suffixes in Tungusic Languages” *Linguistic Typology of the North* (T. Kurebito ed., ILCAA) 1:125-140, 2008年、査読無
- ⑯風間伸次郎“‘Third’ Person Pronouns in Udihe and Nanai” *Linguistic Typology of the North* (T. Kurebito ed., ILCAA) 1:141-153, 2008年、査読無
- ⑰風間伸次郎“The ‘plural’ markers in Udihe” *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses* (T. Kurebito ed., ILCAA) 229-246, 2008年、査読無
- ⑱津曲敏郎「ウデへ語における中国語借用の一側面：チョウセンニンジン関係語彙を中心に」『北海道民族学』(北海道民族学会) 3:37-45, 2007年、査読有
- ⑲津曲敏郎、呉人恵、遠藤史“Siberia: Tungusic and Palaeosiberian” *The Vanishing Languages of the Pacific Rim* (O. Miyaoka et al. eds., Oxford University Press) 387-405, 2007年、査読有
- ⑳津曲敏郎「無文字言語のゆくえ：北方少数民族言語はどう生き残れるか？」『環北太平洋の言語』(津曲敏郎編、北海道大学) 14:159-166, 2007年、査読無
- ㉑風間伸次郎「ナーナイ語とウデへ語の付属語について」『アジアとアフリカの言語と言語学』(東京外国語大学) 2:49-83, 2007年、査読有
- ㉒風間伸次郎「ツングース諸語の三人称代名詞について」『華夷訳語論文集』語学教育フォーラム(福盛貴弘・遠藤光暁編、大東文化大学) 13:173-184, 2007年、査読無
- ㉓風間伸次郎「ウデへ語の「複数」を示す要素について」『環北太平洋の言語』(津曲敏郎編、北海道大学) 14:103-118, 2007年、査読無
- ㉔津曲敏郎「話者による危機言語の記録とその活用：ウデへ語絵本作りをとおして」『環北太平洋の環境と文化』(北海道立北方民族

博物館編、北海道大学出版会) 134-143, 2006年、査読無

⑤風間伸次郎「ナーナイ語の形動詞について」『言語研究におけるコーパス分析と理論の接点』(敦賀陽一郎他編、東京外国語大学) 95-108, 2006年、査読無

〔学会発表〕(計5件)

①津曲敏郎「少数民族言語によるライフ・ヒストリーの記録」日本オーラル・ヒストリー学会第7回大会(招待コメンテータ)、2009年9月12日、北星学園大学(札幌市)

②風間伸次郎「ツングース諸民族の口承文芸について」シンポジウム「口承文芸の魅力ーアイヌとその隣人」(北海道大学アイヌ・先住民研究センター主催、招待講演)、2009年6月14日、北海道大学(札幌市)

③風間伸次郎「ツングース祖語における接近音について」日本言語学会第137回大会(研究発表)、2008年11月29日、金沢大学

④風間伸次郎「極東にいろいろいるゼツングース諸語」日本言語学会第133回大会(シンポジウム講演)、2006年11月18日、札幌学院大学

⑤津曲敏郎「無文字言語のゆくえ：北方少数民族言語はどう生き残れるか」第18回社会言語科学大会(招待講演)、2006年8月26日、北星学園大学

〔図書〕(計10件)

①津曲敏郎編訳(A.カンチュガ著)、北海道大学大学院文学研究科、『ウデヘ語自伝テキスト2：青年時代』(CD1枚付き)2010年、175頁

②津曲敏郎編(A.カンチュガ訳)、北海道大学大学院文学研究科、『星の王子さま：ウデヘ語・ロシア語対訳版』2009年、180頁

③風間伸次郎採録・訳注、北海道大学大学院文学研究科、『エウエン語テキスト2(B)』(DVD1枚付き)2009年、316頁

④風間伸次郎採録・訳注、北海道大学大学院文学研究科、『ナーナイの民話と伝説11』(CD1枚付き)2008年、169頁

⑤津曲敏郎編(池上二良著/E.A.ビビコワ訳)、北海道大学大学院文学研究科、『ウイルタ口頭文芸原文集(ロシア語逐語訳版)』2007年、114頁

⑥津曲敏郎編(A.カンチュガ著)、北海道大学大学院文学研究科、『ウデヘ語自伝テキスト5：狩猟物語(ウデヘ語・ロシア語版)』2007年、184頁

⑦風間伸次郎採録・訳注、北海道大学大学院文学研究科、『ウデヘ語テキスト3』(CD1枚付き)2007年、269頁

⑧風間伸次郎採録・訳注、北海道大学大学院

文学研究科、『ナーナイの民話と伝説10』(CD1枚付き)2007年、273頁

⑨風間伸次郎採録・訳注、北海道大学大学院文学研究科、『ソロンの民話と伝説1』(CD1枚付き)2007年、110頁

⑩津曲敏郎編(A.カンチュガ著)、北海道大学大学院文学研究科、『ウデヘ語自伝テキスト4：妻ファヤの思い出(ウデヘ語・ロシア語版)』2006年、257頁

〔その他〕

(1) 新聞記事

①「サハリン先住民族「ウイルタ」の叙事詩「ニグマー」文字化に着手：北大3人招きテープ分析」『北海道新聞』2009年6月2日

②「サハリン先住民族 ニブヒ語日ロ研究を：専門家来道 音声資料解説に期待」『北海道新聞』2008年9月4日

③「北大院生・山田さん ウイルタ語の方言調査：サハリン北部で初の本格記録」『北海道新聞』2008年9月22日

④「ウイルタ語を守れ：池上北大名誉教授編集 ユジノで教科書」『北海道新聞』2008年4月15日

(2) 受賞

①風間伸次郎：第37回(2009年度)金田一京助博士記念賞受賞(上記図書③⑤を含む一連の調査研究に対して)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津曲 敏郎 (TSUMAGARI TOSHIRO)  
北海道大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80113588

(2) 研究分担者

風間 伸次郎 (KAZAMA SHINJIRO)  
東京外国語大学・外国語学部・教授  
研究者番号：50243374

(3) 研究協力者

山田 祥子 (YAMADA YOSHIKO)  
北海道大学・大学院文学研究科・博士課程